

04 月号

あふ

aff

農業を
始めたい!



農林水産業者の朝

宮城県

ギンザケ養殖業者の朝

廃校再生プロジェクト

福岡県

旧木屋小学校

農業を始めたい！



夢に向かって羽ばたく 若き農業者

全国には、夢の実現に向かって生き活きと農業に取り組んでいる若い農業者がたくさんいます。

2018年から岩手県花巻市大迫町（おおはさままち）でぶどうの栽培を行っている東京都出身の鈴木寛太さんに、就農のきっかけや将来の目標などについて伺いました。

岩手県花巻市
かんたはうす運営組合
鈴木寛太さん





取材に伺ったのは1月。葉がすっかり落ちて、枝のみが残っている冬のぶどう畑では、剪定作業を行います。「切ったところから次の枝がぐんと伸びてくるので、方向を考えて剪定します」

鈴木寛太さんの
ぶどう畑



鈴木さんの畑の中で最も大きな50アールのぶどう畑。生食用のぶどう畑では、キャンベル・アーリーをはじめ、ナイアガラ、ポートランド、レッドナイアガラ、シャインマスカット、サニールージュといった品種を栽培しています。

合計1ヘクタールの畑で
ぶどうを栽培

岩手県花巻市大迫町は、県内有数のぶどうの産地。1950年頃からぶどう栽培が始まり、1970年頃からはワインづくりも盛んに行われてきました。現在、同町には約120軒のぶどう農家がありますが、鈴木寛太さんもその一人。引退するぶどう農家から畑を引き継ぐ形で2018年から栽培を始め、今では生食用のぶどう畑3カ所とワイン用のぶどう畑1カ所、合わせて約1ヘクタールの畑で栽培を行っています。生食用のぶどうのメイン品種は、古くから同町で栽培されている「キャンベル・アーリー」。「全国ではあまり出回っていませんが、東北地方ではポピュラーな品種。甘味だけではなく酸味もある、どこか懐かしいぶどうです」。また同町は、1965年にオーストリアのワイン産地、ベルンドルフ市と姉妹都市提携を結び、その際に「ロースラー」という品種のぶどうを譲り受けました。現在、日本でこの品種を育てているのは、鈴木さんを含めた町内の10数軒のぶどう農家のみだそうです。鈴木さんはこのロースラーを使って委託醸造によるワイン造りも行っています。

地域おこし協力隊として大迫町に移住

東京都大田区の蒲田出身の鈴木さんが岩手県と関わりを持つようになったきっかけは、2011年3月の東日本大震災でした。当時大学生だった鈴木さんは、9月から大学のボランティアプログラムに参加し、卒業するまでに7回岩手県の沿岸地域や遠野市に通いました。「全国から届く寄贈本の整理や文化財レスキューなどをしていたのですが、行くたびに現地の方々の温かさに触れて、逆に元気ももらっていました。それが不思議で、答え探しをしたいと思ったのです」。大学卒業後は神奈川県内のIT企業に就職したものの、岩手のことがずっと忘れられなかった鈴木さん。そんな鈴木さんに友人が、花巻市で第1期の地域おこし協力隊の募集があることを教えてくれました。「花巻市の4つのエリアそれぞれに隊員の募集があったのですが、東京での説明会で大迫町にあるワイナリーの若い社員が熱いプレゼンをしていて、興味を持ちました」。そして2015年8月に大迫町に移住し、地域おこし協力隊のミッションに取り組みました。同町でのミッションは、ぶどうを通じた町の振興。鈴木さんはさまざまなイベントを催して県内外から人を集め、ぶどうのPR活動を行うことで町を盛り上げてきました。



日本では大迫町にしかない貴重なワイン用品種、ロースラーの畑。大迫町では低い位置からまっすぐ上に枝を誘導する「垣根仕立て」が主流です。

新規就農者とベテラン農家をつなぐ架け橋に

地域おこし協力隊での活動を終える2018年、鈴木さんは引退する1軒のぶどう農家から、後継者を探してくれないかという相談を受けました。大迫町のぶどう農家は、約8割が70代以上の高齢者。毎年のように1、2軒引退する農家があり、産業の維持が危ぶまれています。鈴木さんはつてを頼って後継者を探したのですが、やがて自らが引き継いでぶどう農家になることで、これから新規で就農する人とベテラン農家をつなぐ架け橋になりたいと思うようになりました。「自らぶどう栽培をやったほうが説得力が増しますし、農家の皆さんと苦楽を共にできる。そこで就農に踏み切りました」。協力隊の活動を終えた8月からは、花巻市集落支援員として花巻市大迫総合支所で働きながら、その合間にぶどう畑の世話をしている生活が始まりました。



ロースラーの畑では、約2トンのぶどうが収穫できますが、そのうち約8割を地元のワイナリーに出荷し、残りを委託醸造して「KANTA WINE」の名前で販売しています。タンニンが豊富なロースラーは、ワインにすると黒に近い色になり、スパイシーな味わいが特徴です。忙しい収穫の時期には、友人やその家族が集まって手伝いをしてくれることも。

周囲のサポートを得ながら一から栽培を学ぶ

ぶどうのPR活動をしていたものの、栽培の知識や経験はほとんどなかった鈴木さん。畑の所有者である引退した農家や他の農家の人たちに教えてもらいながら、一からぶどう栽培を学んでいきました。「農家の皆さんそれぞれにその人なりのやり方があるので、いろいろ試して私に合った方法を探しました。作業自体は比較的単純なので、やることを覚えるだけならあまり苦労はしませんが、日々の手入れによってぶどうの味は変わってきます。まだまだ勉強することは多いですね」。また天候など、技術ではどうにもならない要素もあります。「とくにロースラーは皮が薄いので、雨が続いて水分の供給が過多になるとすぐ割れてしまうんです。割れて腐った粒をそのままにしておくとワインの味に影響が出るので、見つけ次第一粒一粒手で取り除かないといけない。それがすごく大変です」。苦労を乗り越えながら畑を増やし、2021年3月末には集落支援員を辞めて完全にぶどう農家として独立しました。「これまでに2回、友人の結婚披露宴で私が育てたぶどうで造ったワインをふるまったのですが、みんなが幸せそうに飲んでいる姿を見て、ぶどう農家になって本当に良かったと感激しました」

鈴木寛太さんの収入の内訳

その他 2割

- ・大迫ぶどう産業振興協議会からの園地管理・薬剤散布作業受託
- ・高校魅力化コーディネーター
- ・民泊事業



ワイン用ぶどうの生産出荷・ワイン販売

2割

生食用ぶどうの生産出荷・販売

6割



鈴木さんが高校魅力化コーディネーターを務めている県立大迫高等学校。生徒たちと大迫町内に設置されている屋外ベンチをリフォームしたり、大迫の魅力講座の一環として全校生徒にぶどう栽培の指導を行うなどの活動をしています。



ぶどう栽培を軸にしながら 町の活性化に貢献

鈴木さんは、自分の畑の世話以外にも、大迫ぶどう産業振興協議会との契約で、引退する農家の後継者が見つかるまで畑の維持管理を受け持つ役割も担っています。またぶどう栽培以外でも、さまざまな仕事や活動を通じて町の活性化に貢献しています。2021年には、全校生徒60人弱の県立大迫高等学校からの依頼で高校魅力化コーディネーターに就任。講演などの他、学校と地域を繋ぐさまざまなプロジェクトに携わり、生徒たちが地域や学校の魅力を確認したり発信したりする手助けをしています。

内外の人々の 交流場として設けた 「かந்தはうす」

また、2016年には自宅を「かந்தはうす」と名付け、農業体験などのために大迫町を訪れる人々の交流の場になっています。かந்தはうすには、東京時代の友人から岩手県での活動を通じて知り合った人まで、さまざまな人々が訪れます。「全国のいろいろな大学の教授や学生がゼミ単位、サークル単位で研修や合宿に来てくれたりもします。またグリーンツーリズム推進協議会メンバーとして、中学校の修学旅行生の受け入れもしています」。友人、知人限定で民泊事業も行って、年間のべ40名ほど泊めているそうです。「新型コロナウイルス感染症が収束したら、もっと外からの関わりを増やし、地域を元気にしたいですね」



鈴木さんの自宅兼農業体験施設の「かந்தはうす」には、収穫時期を中心に全国からいろいろな人々が泊まりにやってきます。さまざまな活動を通じて得た人とのつながりは、鈴木さんにとって大きな財産です。



チンドン屋「早池峰一座」の一員でもある鈴木さん。白塗り化粧で県内各地のイベントに出演しています。また、かந்தはうすがある大迫町樹沢地区の自治公民館長にも就任。「地域に溶け込むために、どんな誘いも断らない。投げられたボールは全部打ちかえしてきました(笑)」

ぶどう産業を 未来につなげていくことが夢

花巻市では、鈴木さんがぶどう農家となった2018年以降、十数人が新規就農してぶどう栽培を始めています。鈴木さんは、今後もその数は増えていけると語ります。「近年はワインブームなどもあって、ぶどう農家になりたいという人が増えています。山梨県や長野県では空いているぶどう畑が少なく非常に競争率が高いのですが、東北はまだそれほどでもありません。私もそうでしたが、農業器具などもあわせて受け継ぐことで、その年から農作業を始めて収穫することができる畑が多いのが魅力です」。就農を考えている人に自身の経験を伝え、大迫町のぶどう産業を未来につなげていくことが鈴木さんの夢です。





「これからさらに多くの新規就農者を呼び込むためには、『この規模の畑だとこのくらいの収入が見込めますよ』という具体的な話ができないといけない」と語る鈴木さん。「そのために私たちのぶどうがもっと売れるようにしたいですね。すでにポケットマルシェやふるさと納税を活用した販売は行っていますが、そのような取り組みを進めることで、大迫町のぶどう農家の収入がもっと増えていけば、首都圏にいる若者たちの中からもやりたいという人が増えてくると思うのです」



大切なのは、 まず就農する地域になじむこと

他の地域から移住して農業を始める人にとって一番大切なのは、栽培技術を学ぶことよりも、まずその地域になじむことだと語る鈴木さん。「地域の空気感やルール。そういったものをわからないまま突っ走ると孤立し、分断が起きてしまう。その結果、嫌になって帰ることになってしまいます」。その意味では、いきなりの就農ではなく、まず地域おこし協力隊として大迫町に移住したことは、鈴木さんにとって結果的に良かったそうです。「とはいえ、私はこの町の協力隊第1号でしたし、最初の頃は新参者として警戒されることも多かったです。そこを自分からガツガツとコミュニケーションを取りに行くことで、次第に心を開いてくれるようになりました。私がどんな人間かわかってもらえれば、向こうから誘ってくれたり、いろんな人を紹介してくれるようになります。農業は一人ではできないことも多いので、協力してくれる人、助け合える関係性をつくったほうが幸せになれると思います」

COLUMN 01 新規就農者に対する 国の助成金制度

国は、新規就農者育成総合対策の一環として、就農に向けた研修資金（就農準備資金）や経営開始資金の交付、経営発展のための機械・施設等の導入支援（経営発展支援事業）を行っています。就農準備資金は、都道府県が認める農業大学校などの研修期間で研修を受ける就農希望者に、最長2年間、月12.5万円（年間150万円）を交付します。経営開始資金は、新規就農される方に、農業経営を始めてから最長3年間、月12.5万円（年間150万円）を交付します。経営発展支援事業は、都道府県が新規就農される方に、機械・施設等の導入を支援する場合、都道府県支援分の2倍を国が支援します（補助対象事業費上限1,000万円、国の補助上限2分の1）。



農業をはじめの.JP

<https://www.be-farmer.jp/support/>

COLUMN 02 「職業としての農業の魅力」を発信する 農業の魅力発信コンソーシアム

「農業の魅力発信コンソーシアム」は、活躍する農業者（ロールモデル）を通じて「職業としての農業」の魅力を発信することを目的とした民間企業による共同事業体です。「実際に農業現場で活躍している農業者の姿を通じて、他の職業にはない農業の魅力を知らせることが重要」という共通の意識のもと、農業や地方移住に関連する事業を展開する企業9社が連携・協力し、農林水産省の補助事業も活用してロールモデルとなるような全国の農業者たちを紹介しています。今回の記事で紹介した鈴木寛太さんもその一人です。



note
「農業の魅力発信コンソーシアム」

<https://note.com/nmhconsortium>

今週のまとめ

新規就農を志すきっかけや目的は人それぞれですが、

みな熱い思いを抱いて取り組んでいます。

こんな先輩の農業者たちの姿は、

これから農業を志す人たちの心強い支えになってくれるでしょう。

農業を始めたい！



農業大学校で

就農に必要なスキルを身につける

「農業に関わる仕事に就くために、必要な知識や技術を身につけたい」。

そんな人のための学びの場には、さまざまな選択肢があります。

全国41道府県にある「農業大学校」もそのひとつ。

授業の内容から学校生活まで、気になる情報をまとめました。



農業大学校とは？

農業大学校は、就農をめざす人や、経営発展のためにスキルアップを図りたい農業従事者を対象とした研修教育機関です。道府県立の農業大学校は、農業経営の担い手を養成する中核的な機関として、全国41道府県に設置されています。また公立の農業大学校以外に民間の研修教育機関もあります。

農業大学校には3つの学習課程がありますが、中心となるのは、高校卒業程度の学力を有する人を対象にした「養成課程」で、標準的な履修時間は2年間2,400時間（80単位）以上です。また多くの学校では、すでに就農しているがさらに技術や知識を高めたい人、これから新たに就農を希望する人などを対象に、1日から数週間の短期間で学べる「研修課程」を設けています。この他に、養成課程を修了した後、さらに高度な知識や技術を学ぶ「研究課程」を設けている学校もあります。

次世代のスペシャリスト養成に取り組む 山形県立農林大学校



お話を伺った **岸哲嗣** 教授

充実した7つの学科体制

今回訪れたのは、山形県新庄市にある山形県立農林大学校。100ヘクタールの広大な敷地には、水田にハウス施設、果樹園、さらには林業実習が行える林もあります。また山形県の農業試験研究機関が隣接していて、最先端の技術に触れることもできます。農業大学校の学科やカリキュラムは学校によってさまざまですが、同校の養成部は、7つの学科体制を整えています。特徴的なのは、他の農業大学校にはあまりない林業と農産加工の学科があることです。

「山形県では、豊かな森林資源を活かし、林業振興と地域活性化を図る『やまがた森林（モリ）ノミクス』を推進しています。そこで、この『やまがた森林（モリ）ノミクス』を担う林業の次世代リーダーを育成するため2016年に林業経営学科を新設しました。また農産物の加工や衛生管理については、各学科内の授業で触れる程度の学校が多いのですが、当校では6次産業化の流れなどを反映し、独立した学科にしています」

山形県立農林 大学校の設置学科

稲作経営学科

果樹経営学科

野菜経営学科

花き経営学科

畜産経営学科

農産加工経営学科

林業経営学科

少人数での 実践的なプロジェクト学習

1学年の定員は約60名。1学科が1、2年合わせて10数人程度と、少人数でしっかり学べます。ちなみに農家出身の生徒と非農家出身の学生の割合はほぼ半々だそうです。「昔は農家出身者がほとんどだったようですが、近年は農家出身でなくとも農業ができるということが周知されてきているのだと思います」。農業大学校は、基本的に講義や演習、実験といった座学と実習とがおおむね半分ずつとなるように設定されていて、座学で学んだことを実際の作物などで確認することで、就農に必要なスキルを身につけていきます。同校では、田畑やハウス、牛などについて、1年生の時は交代で管理を行います。2年生からは一人で担当のエリアや棟などの管理を任せられます。そして収集したデータを元に、成果を卒論としてまとめます。



学生の大半は山形県の出身ですが、他校に少ない林業経営学科を中心に、他県の出身者もいるそうです。

12月に開催される卒業論文発表会。学科を超えて盛んに質問が飛びかいます。発表会で優秀な成績を収めた3名は東日本ブロックの農業大学校等プロジェクト発表会に参加します。



スマート農業や ICT活用技術に触れる

農業現場においてスマート農業の活用が進むなか、全国の農業大学校ではその教育にも力を入れています。同校でも「スマート農業I」の科目の中で講義やドローンを活用した農業技術の実演などに取り組んでいます。「またICT活用に欠かせないパソコン操作の習得のために、学生の関心が高い動画編集を授業内容に取り入れ、各学科の紹介動画を作成するなどの工夫も行っています」

スマート農業関連メーカーの協力を得て、ドローンによる葉色リモートセンシング技術を実演。また学生によるドローン操作の体験も行っています。

地域の人々にも人気の農大市場

山形県立農林大学校では、学生が実習を通じて生産した農産物や加工品を販売する「農大市場」を年4回開催しています。学生にとっては実体験で販売管理を学べる

貴重な機会ですが、地域住民にも大好評。昔ながらの製法でつくった味噌や梅干し、材料にこだわったトマトケチャップなどの加工品にはファンも多いのだとか。



実用的な免許や資格を取得できる

在学中には、トラクターやコンバインの運転免許をはじめとするさまざまな免許や資格を取得することができます。大型特殊自動車免許（農耕用）やけん引自動車免許（農耕用）などは敷地内に教習コースがあり、校内で研修から試験までおこなうことが可能です。

山形県立農林大学校在学中に 取得できる主な免許や資格

全学科共通

大型特殊自動車免許（農耕用）
けん引自動車免許（農耕用）
産業用無人ヘリコプター技能認定
日本農業技術検定（2、3級）
毒物劇物取扱者資格（農業用、一般）
危険物取扱者資格（乙4種、丙種）
農業簿記検定（3級）
販売士検定（2、3級）

花き経営学科

フラワー装飾技能検定（2、3級）

畜産経営学科

家畜商
家畜人工授精師

林業経営学科

チェーンソー
刈払機
高性能林業機械（3種類）
玉掛け
小型移動式クレーン
車両系建設機械（3トン以上）
赤十字救急法
不整地運搬車

仲間たちとの交流が深まる寮生活

家畜の世話など早朝の作業があるため、農業大学校は寮生活が基本。同校も全寮制です。また敷地内には体育館やグラウンドがあり、授業後に野球、バレーボール、スキーなどの部活動をする学生もいます。



寮は2人部屋で、基本的に夏までは1年生と2年生が同部屋となり、以後は同学年同士が同部屋になるそうです。

ほとんどの学生が 農林業に 関する進路へ

同校は進路決定率が10年連続で100パーセント。農業法人への雇用就農支援を含め、入学後からきめ細かく進路指導を行っています。卒業後は、ほとんどの学生が農林業に関する進路を選びます。また専修学校として認可されているため、4年制大学への3年次編入も可能です。

山形県立農林大学校の進路実績

	令和元年 卒業生	令和2年 卒業生	令和3年 卒業生	
就農	就農	11	8	12
	農業法人就職	20	13	20
	研修後就農	1	0	0
就職	公務員	4	1	2
	農協など	1	13	5
	農林業関連企業	5	10	7
	食品関連企業	5	6	5
	一般企業	0	0	1
進学	4大編入学など	5	6	2

東北初の農林業系専門職大学の 令和6年4月開学に向けて設置許可申請中

専門職大学とは、特定の職業のプロフェッショナルになるために必要な知識・理論、そして実践的なスキルの両方を身に付けることのできる大学です。令和6年4月開学に向けて設置許可申請中の「東北農林専門職大学（仮称）」は、優れた技術と経営力を持って農林業をリードし、世界に羽ばたく人材を育成することを目的に、農林業の生産・経営に係る知識と理論に裏付けられた技術、地域活性化に向けた課題解決の実践的手法、農林業に関連する分野の応用的な知識などを講義だけでなく学内外の豊富な実習で学びます。山形県立農林大学校の敷地に設置される予定で、農林大学校は附属学校として存続します。

*設置計画は予定であり、内容が変更となる場合があります。



在校生インタビュー

*学年は取材時（2023年1月）のもの



INTERVIEW

01

果樹経営学科2年 松田真魁(しんかい)さん

小学生の頃からの趣味を
仕事にしたい



小学校6年生の時からプランターでの野菜栽培が趣味だったという松田さん。実家は非農家ですが、中学校3年生の時に将来は就農したいと考え、農業系学科のある高校へ進学。「高校では稲作から畜産まで幅広く勉強しましたが、山形県で盛んな果樹栽培に興味を持ったので、卒業後山形県立農林大学校に進むことにしました」。英語や数学などの一般教科もある高校と違って、農林大学校は農業関連の授業がほとんどなので、2年間ながら高校での3年間より濃密な時間を過ごせたそうです。「また、在学中にトラクターなどの機械の免許が取得できたのも良かったです」。今春の卒業後は県内のさくらんぼ農園への就職が決まっています。「農園には2年生の時の5月にインターンシップに行き、その後もずっと休日にアルバイトをさせてもらっていました」。将来的には独立して果樹園の経営をすることが夢だと語る松田さん。「すぐには無理なので、10年間はここでしっかり働きたい。農園の社長にもそうって理解していただいています」



学校生活で印象に残っているのは、実際に果樹に触れている実習の時間。「この1年間は、卒論のために4本の西洋梨の管理を一人で行いました」



INTERVIEW

02

畜産経営学科2年 鈴木広美さん

実家の米沢牛と米を
みんなに食べてもらいたい



「小学校の卒業文集に『将来は実家の農家を継ぎます』と書きました。その割には何も手伝いしていなかったんですが(笑)」という鈴木さん。実家は86頭の米沢牛を飼育している畜産農家。また約10ヘクタールの水田で米も作っています。好きなバトントワリングに打ち込みたいという理由で青森県の高校に進み、卒業後に山形県立農林大学校に入学しました。「農大には約20頭の牛がいるのですが、2年間ずっと交代で世話をしていたのでそれなりのスキルは身についたと思います」。卒業後実家に戻ったらすぐに牛の世話を始めるそうです。「以前は祖父が牛、父が田んぼをやっていたのですが、今は父が全部やっているので、早く牛を引き継いで一人で回せるようになりたいです」。実家を継いだ後、将来的には農家レストランも経営したいそうです。「米沢牛のようなブランド牛は県外に売ってしまうので、意外に地元の人には食べられない。そこで実家で育てた米沢牛の肉と米を食べられる場所をつくりたい。中学校の同級生で地元の調理学校に通っている子がいるので、一緒にやれたらいいなって話をしています」



在学中、当番時には朝5時半に起きて牛のエサやりや畜舎の掃除を。「寮の同室は花き経営学科の子だったので、起こさないように気をつけて部屋を出るようにしていました」

今週のまとめ

実践的な内容のカリキュラムで農業経営の知識と技術が学べる農業大学校。

将来的に独立を目指す人も、農業法人などへの就職を考えている人も

目的に応じて必要なスキルを身につけることができます。

農業を始めたい！



農業法人への就職と 大きな夢

新規就農する場合、個人で起業する、親の農業を継ぐといったケースの他、
農業法人に就職し従業員として給料をもらうというスタイルもあります。
今回は、熊本県にある農業法人の雇用現場における働き方改革の取り組みや
就職した若手農業者の声を紹介します。





働いている人が
誇りを持てる職業に



ワークライフバランスの取り組みを推進

熊本県阿蘇の外輪山の麓に立地するセブンフーズ（株）。この農業法人の主な事業は養豚で、資源循環型農業により野菜、飼料作物の生産も行っています。県内にある5か所の養豚場で、常に2万5,000頭を飼育し、年間5万頭を出荷しています。ここで生産される豚肉は「肥後あそび豚」「未来村とん」のブランド名で店頭に並びます。

現在、社員数80人、平均年齢は33歳、正社員が約9割を占めます。養豚の場合、肥育に関する知識やスキルが必要で、社員の育成に時間がかかるため、正社員雇用が理想だといいます。そのため、国内や海外の進んだ農業を現地で学ぶ研修や、社員のスキル

アップを目的とした各種研修制度、資格を取得するための受講料の会社負担などの支援を積極的に行なっています。また、社員が作業フローを確認し合いながら確実に週に2日間休みを取り、最大9日間連続して取得できる長期休暇制度も取り入れています。育児や介護の支援制度の理解を深めるために社員同士の交流会を開催するなど、社員の幸せとは何かを全員で考え、働きやすい環境や設備などの改善に社員自らが取り組むように促しているという同社。理想とする、環境に負荷をかけない資源循環型農業の確立には、未永く就業してもらえる人材の育成が最も大切だと考えているのです。

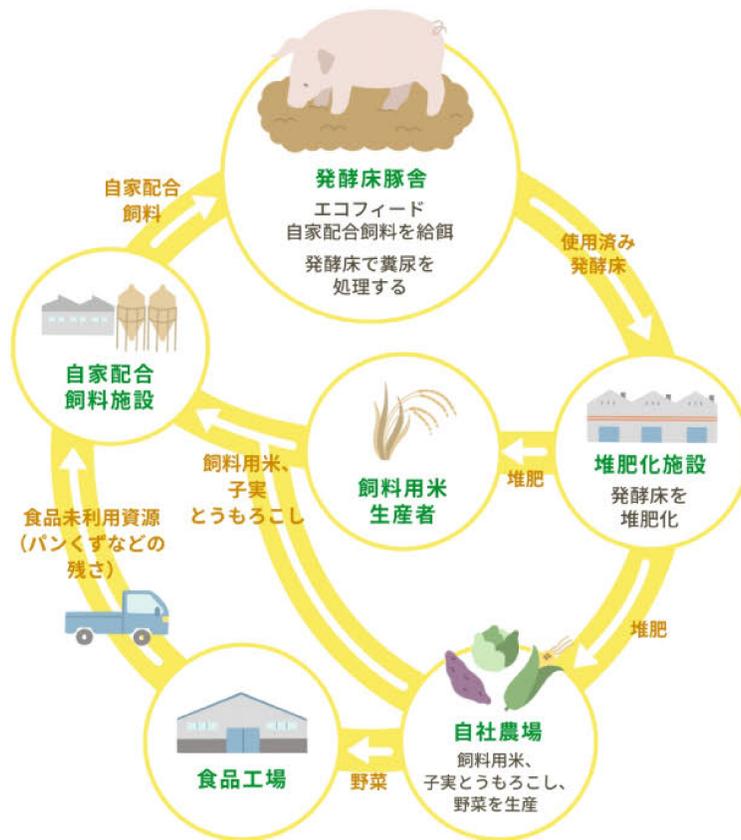


セブンフーズが
実践している
資源循環型農業

豚の排泄物を発酵床で分解する独自の技術を開発。同社が理想とする持続可能な資源循環型の農業、食品リサイクルループを実現した。

- ・ 使用済みの発酵床を熟成させて良質な完熟堆肥に
- ・ この堆肥を、飼料用米、子実とうもろこし*、野菜の生産に利用
- ・ 飼料用米と子実とうもろこしは、自家配合飼料として利用
- ・ 野菜は、食品工場へ原料として納品
- ・ 食品工場からの未利用資源も自家配合飼料として利用
- ・ 自家配合飼料で豚を肥育

*子実（しじつ）とうもろこし：完熟させたとうもろこしの子実（粒）だけを収穫した飼料用とうもろこし。



今年収穫した子実とうもろこし。飼料用米の生産と合わせ、飼料の自給化を目指してこれから最も力を注ぎたい分野だ。

就農ストーリー

「会社の理想が、僕の目標と一致しました」



藤澤秀斗さん(20歳)

熊本県立熊本農業高等学校畜産科卒、入社2年目。実家は非農家で、高校に入学した当初は獣医師になるため大学進学を考えていたが、実習を経験するうちに農業の面白さを実感し、セブンフーズ（株）への就職を決意。

動物が好きで農業高校に進学

こどもの頃から動物が好きだったので、動物に関わる生活がしたいと思っていました。農業高校なら動物の飼育管理技術などを幅広く学べることを知り、熊本県立農業高等学校畜産科に進学、牛の飼育や養豚、養鶏を学び、特に養豚に興味を持ち始めました。高校2年生の時、「農業クラブ*」で「養豚における食品廃棄物を利用した飼料製造に関する研究」をテーマにプロジェクト発表を行い、県大会、九州大会を勝ち抜いて、全国大会で最優秀賞を獲得することができました。

それがきっかけで、東京で行われた農業関係のイベントで研究発表をする機会がありました。そこにコメンテーターとして参加していた当社の前田佳良子社長の資源循環型農業の考え方などに魅力を感じ、高校の現場実習をここで行ったところ、会社の理念と僕の目標が合致していたので入社しました。

*農業クラブ：農業高校で学ぶ生徒の組織で、学校行事や地域貢献活動などに取組む。例年10月に開催される全国大会では、プロジェクト発表や意見発表、各種競技会等が実施され、全国の仲間との交流を深めています。



写真提供：セブンフーズ（株）

入社後の仕事でまず驚いたのは、豚の頭数が多く管理が大変なこと。高校では豚の飼育頭数がだいたい100頭くらいだったのに対して、今は5人体制で6,000頭を担当しています。豚にストレスをかけないように飼育することが大事なので、そこに最も気を使っていますが、どんなに気を使っても病気になってしまう個体もいます。生命産業の厳しさを感じることもありますが、人々の食を守る仕事なので、誇りをもってやっています。現在入社2年目で、出荷を担当しています。この会社に就職したことで、大きな将来の夢を持つことになりました。その夢は農場長になること。そして、ゆくゆくは自分の養豚農場を持ち、セブンフーズのように地域の養豚業に貢献したいと思っています。

当面の目標としては、農業のあまり良くないイメージを払拭していくこと。実は僕も農業高校に進学する時は、「農業は休みがなくて大変そう」などと思っていました。ここでも、あまり休みが取れないかもしれないと思っていましたが、そんなことはありませんでした。ですから知らずに抱く偏見や誤解を少しでもなくしていければと考えています。

🕒 藤澤さんの一日の作業スケジュール

7:30	出社。防疫のためシャワーを浴びる
8:00	始業。朝礼 16棟ある豚舎を見回り、豚の健康チェック。給餌。 オートソーティングシステム（体重を自動計量して出荷適期の豚を選別するシステム）の掃除や豚舎の設備、機械の点検・整備。 出荷準備、など。
12:00	お昼休憩
13:00	豚舎の洗浄、発酵床資材の再発酵や堆肥化作業。 餌づくり、給餌。 出荷後の豚舎の清掃、など
17:00	終業。シャワーを浴びて帰宅する

「ウィークリー管理」といって、曜日別に作業内容を振り分ける方法を採用しています。その結果、曜日によって作業が少なくなる日ができるため、休日を設定しやすくなります。

ウィークリー管理の主な作業内容

出荷は週に約400頭（1日当たり100頭）。出荷する豚の選定とトラックが横付けされる係留所への移動、豚舎の清掃や消毒作業、床の設置、そのほか健康管理やワクチン接種など、毎日作業内容が異なる。



写真提供：セブンフーズ（株）



朝は8時から仕事を始め、夕方5時には仕事が終わります。作業は日によって違いますが、この日の午前中はシステムの点検整備、午後は発酵床資材の堆肥化作業などを行いました。一人暮らしで通勤は車です。休日はジムに泳ぎに行ったり、友達と釣りに行ったり。次はキャンプを始めたいと思っています。

就職とは学びの場を選ぶこと!

セブンフーズ（株）代表取締役社長の前田佳良子さんは、両親が3頭から始めた養豚業を継ぎ、ここまで規模を拡大してきましたが、小学校の頃、学校でいつも肩身の狭い思いをしていたといいます。

「私が後を継いだら、働いている人たちが誇りを持てる職業にしていきたい、こどもや孫にも喜んでもらえる業界にしていきたいと胸に誓っていました」

前田さんは大学を卒業後、いったん会社勤めをしたのですが、そこで大切なことに気づきました。大人が何か学ぼうとするとお金がかかりますが、会社に就職するとお金をもらいながらいろいろなことを教えてもらえ、社会勉強ができるということ。

それは農業法人に就職する場合も同じことだといいます。「お金をもらいながら農業が学べるのですから、就農希望者は農業法人への就職を選択肢に入れてみてはいかがでしょうか」

農業法人は地域雇用の受け皿となるというミッションもあるので、雇用を充実させるためには就業環境を整えることが絶対条件です。7、8年前に完全週休2日制やノー残業デーを導入した時には、社内の幹部にも心配する声があったという前田さん。

「面接に来る人は働く環境を選んでくるわけですから、納得してもらえるような環境をつくらないといい人材は集まらないし、会社は伸びていかないと思います」

そんな就業環境をより良くしていくためにも、ICT（情報通信技術）を活用した農場の効率化、食育や農育を通じた地域との交流に取り組み、野菜畑をコンピューターで管理するシステムや豚舎を自動で洗浄するロボットなどを導入する予定だそうです。「魅力のある会社でなくては、人は集まりません」と前田さんは結びました。



セブンフーズ（株）の
前田佳良子社長



豚舎の横に並ぶ飼料米やとうもろこしなどの飼料貯蔵タンク。右は妊娠期、授乳期、肥育期など、飼育状況に合わせて飼料配合を行う制御システム



TIPS!

雇用就農資金を活用しよう

農林水産省では、農業法人などが49歳以下の就農希望者（独立就農することを目指す方も対象です。）を新たに雇用する場合に資金（雇用就農資金）を助成しています。



雇用就農資金についてはこちら

https://www.maff.go.jp/j/keiei/nougyou_jinzaiikusei_kakuho/shikin.html

CHECK!

農業インターンシップ

（公社）日本農業法人協会では農林水産省の補助事業を活用して、農業に関心のある人が全国に200ある農業法人などで短期間（2日以上6週間以内）農業を体験することができる農業インターンシップ事業を行っています。詳しくは公式サイトをご覧ください。



公式サイトはこちら

<https://www.be-farmer.jp/experience/intern/>



今週のまとめ

新規就農するために農業法人へ就職するという方法があります。

就職先として魅力のある経営体をめざして、

従業員が働きやすく、成長もできる環境づくりを行っています。

農業を始めたい！



地域ぐるみで 新規就農をサポート

農業大学校などの教育機関だけでなく、
新規就農のための研修事業を実施している自治体は少なくありません。
自治体や地域の農業公社、JAなどが連携して就農希望者の実地研修を支え、
地域での高い営農率を実現している鹿児島県志布志（しぶし）市の事例を紹介します。



新規就農をかなえる 研修制度



研修事業を始めた理由

志布志市は鹿児島県の東部に位置し、国際的な物流拠点・志布志港を擁しています。同市の農業研修事業を実施しているのが（公財）志布志市農業公社です。同公社事務局の猜野宏樹（あべの・ひろき）さんから、ここで行われている研修事業についてお話を伺いました。同市では広大な農地に大規模畑地かんがい*施設を整備して、野菜や茶などを安定的に生産してきました。また、温暖な気候を好むピーマンの栽培も盛んであったことから、1968年に冬春ピーマンの指定産地となり、全国でもトップクラスの生産量を誇る時期もありました。ところが、同市でも高齢化などの影響を受けて、基幹産業である農業の担い手不足が進行。それに歯止めをかけるため1996年、志布志町（当時）に担い手の確保や研修事業などの実践を目的とする農業公社が設立されました。そして、ピーマン栽培を柱とした研修事業を開始したのです。

*畑地かんがい=畑などにおいて栽培される畑作物の育成環境の保持・改善等のために必要な用水を畑地に供給すること。



お話を伺った志布志市農業公社の事務局長・猜野さん。

実際の研修は どんなもの？



志布志市農業公社の松山黒石農場。 写真提供：(公財)志布志市農業公社



室温が調節された暖かい松山黒石農場のハウス内には、ピーマンの株がひしめくように並んでいます。

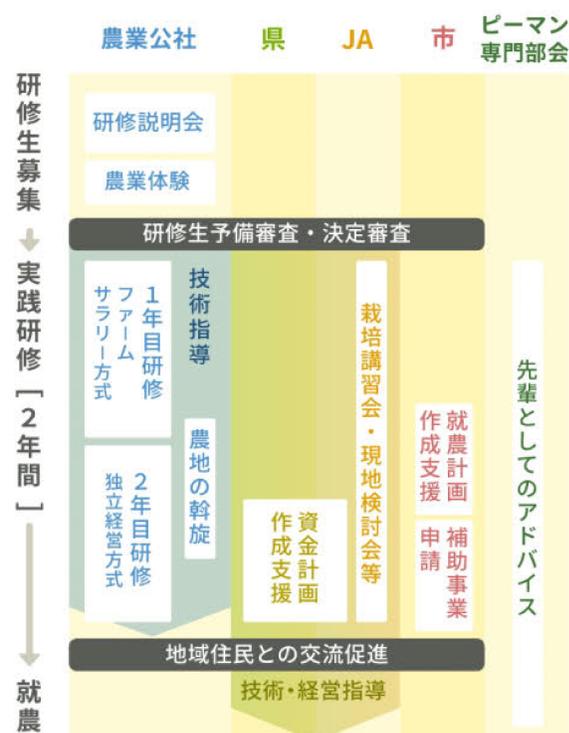
研修に参加するには？

志布志農業公社での研修は冬春ピーマンの実地栽培です。研修場所は、国の農山漁村振興交付金事業を活用して旧松山町地区に建設、整備した「松山黒石農場」。2018年に完成したこの農場には、栽培用圃場が120アール、育苗ハウスが70アールほどあり、研修生はすべてここで作業を学びます。研修期間は2年間。研修条件が「農業に対する固い意志と意欲のある農業後継者や新規就農希望者」であることは当然ですが、重要な点は「研修終了後も志布志市内に居住して営農を継続できる人」ということ。募集人員は3組6名で、年齢はおおむね45歳未満。「単身での受け入れもしているが原則夫婦が望ましい」という猜野さんはその理由を「農作業には人手が必要なものもかなりあり、2人で作業ができるというのは有利ですし、遠慮なく言い合える夫婦だと、やりやすいということもあるのではないかと思います」と話します。

研修時、栽培を任される面積は夫婦2人で研修に参加する場合は20アール、夫婦どちらか1人の場合や単身者は10アールです。1年目は国からの給付金（要申請）と農業公社からの研修手当で、夫婦2人だと月額25万円、夫婦のうち1人や単身者の場合は15万円が支給されます（ファームサラリー方式）。

2年目は研修手当は支給されませんが、収穫物を自分のものとして出荷します（独立経営方式）。多く収穫できれば1年目の研修手当をはるかに超える収入を得られる可能性があります。かつては2年目も研修手当を支給していましたが、独立経営を経験して営農収益を上げる実感を得ることは、気持ちのうえでも就農後の生活に影響するため、2年目は独立経営方式を採用することにしたそうです。その他、ファームサラリー方式の1年目のみ、軽トラックを購入した場合に燃料代を毎月5,000円支給したり、家賃も1万円を超える場合は1万円を限度として家賃補助するなど、生活に対するサポートもしています。

なお、研修はピーマンの苗が出来上がる6月で終わりますが、その後収穫して実際の収益が発生するのは11月になります。6月から11月までは無収入になるので、その間の生活費として、ある程度の自己資金は必要です。



地域における バックアップ体制

志布志市農業公社は公募から研修中の世話、農地の輪旋などを行い、研修終了後には県や市、JAなどの農業関連機関にバトンタッチします。



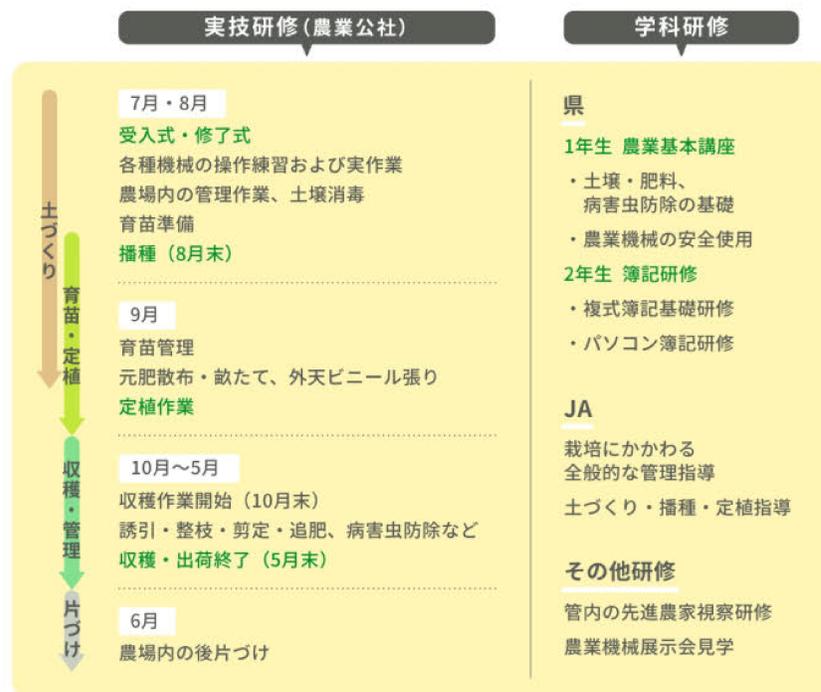
実技も座学も連携指導

実技研修は志布志市農業公社の職員が行いますが、学科研修は県やJAが担当します。

たとえば県では、1年目に土壌や肥料の基礎や農業機械の安全使用などについての講義を、2年目には簿記研修を実施、経営に必要な複式簿記の基礎を習得します。JAでは栽培に関わる全般的な管理に関する指導や、播種・定植、農薬・肥料に関する指導など実践的な知識を身につけられるよう、細かくフォローします。さらに管内の先進農家で行う現地研修では、先輩からさまざまなアドバイスが受けられます。

また、同公社が実施している研修事業の特徴として、農地の斡旋も行っていることがあげられます。個人で農業を始めようという時、農地の確保が困難だからです。

「私たちが研修生の農地を確保するために奔走しています。農地を確保できれば、志布志市内の圃場は用排水路などがきちんと整備されているので、営農にはそれが強みとなります」（猜野さん）



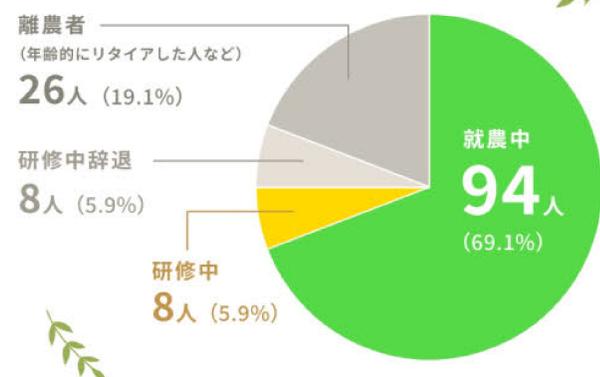
収益を上げて地域で生きる

研修後は同公社に代わって、行政やJAがバックアップしてくれます。研修修了生の定着率は高く、この地に就農する人が増えました。

新規就農者を定着させるには、まずはきちんと収益を上げ、確実に生計がたてられること、つまり儲かる農業であることが必須だと猜野さんはいいます。ある人は「自然豊かな場所に一戸建てを建てたい」と思い夫婦で研修を受けて栽培に励み、就農5年目にその夢をかなえました。また、家族との時間や趣味に時間を費やすことを大切にしながら営農することを望む人も多いようですが、志布志市でのピーマン栽培は2か月間の夏休みが確保できるため、そこにも魅力を感じている人が多いといえます。そのためピーマン部会員には、ほかの職業から転身した地元出身者が多く、また研修修了生の二世も少なくないそうです。

「望む暮らしの形は人それぞれですが、それを実現できる職業のひとつとして、農業をとらえる人も多くなってきたのでは」という猜野さんの言葉が印象に残りました。

これまでに受け入れた研修生の定着状況
(1996年から2021年度までの受入研修生136人)



ただいま、研修中です！

古森健次さん・佳奈さん夫妻

松山黒石農場で作業中の古森健次さん(44歳)。妻の佳奈さんと夫婦で研修に参加、現在2年目です。古森さん夫婦は、小学生の2人の息子さんと茨城県から移住してきました。志布志市農業公社の研修事業については、農業情報提供イベント「新・農業人フェア」で知ったそうです。取材時は、1棟に1,000本の株が植えられているハウス内で収穫の真っ最中でした。ここでは、年間で13トンから14トンの収穫が見込めるそうです。すでにこの研修所近くの農地を借り、研修修了後の準備をしています。





TIPS!

新・農業人フェア
開催！！

2023年1月14日（土）、東京都千代田区の東京国際フォーラムで「新・農業人フェア EXPO」が開催されました。同フェアは、農業に興味のある人やこれから就農しようという人などが、農業に関するさまざまな情報を得られる国内最大級の就農イベントです。当日の出展ブース数は182団体（うちオンライン8団体）。来場者数は昨年度同時期の2倍の約1,000名となり、多くの方に来場いただきました。2023年度も東京、大阪で複数回の開催を予定しています。

COLUMN

農業を始めたい人に
役立つ情報を集めた
ポータルサイト
「農業をはじめる.JP」

職業として農業に興味を持っている人、これから農業を始めたいという人におすすめなのが、全国新規就農相談センターが運営する就農情報ポータルサイト「農業をはじめる.JP」です。就農に向けて具体的なアクションを起こすために必要な情報が満載です。



公式サイトは
こちら

<https://www.be-farmer.jp/>



今週のまとめ

技術や農地の取得など、就農希望者が抱える不安を解決するまで支え

就農をサポートする、地域ぐるみの取り組みがあります。

安心して農業を続けられるのは、

就農後も切れ目ないサポート体制が続くからです。

一日の始まりに密着

農林水産業者の
朝

農林水産業の朝は早い。早朝から働く人々の様子をのぞいてみました。

第11回

ギンザケ養殖業者の朝

佐藤正浩さん [宮城県本吉郡南三陸町]

宮城県南三陸町の志津川湾は、養殖ギンザケ発祥の地。

佐藤正浩さんは、この恵み豊かな海で

長年、ギンザケの養殖に情熱を注いでいる生産者です。

水揚げシーズンを前に、大きくておいしいサケに育つようにと

エサやりに精を出す佐藤さんの朝に密着しました。



PROFILE

1967年生まれ。ギンザケ養殖を行う漁師の父の背中を見て育ち、18歳から自身も養殖に携わる。地元の2代目仲間と結成した「戸倉銀鮭養殖部会」の部会長。

恵み豊かな南三陸の海で
エサを与え、魚を育む



AM5:30

出港準備

2月下旬、夜明け前の波伝谷（はでんや）漁港。佐藤さんは大量のエサやコンテナ、パレットを漁船に積み込んでいます。目の前に広がる志津川湾は、日本有数の養殖漁場。波が穏やかで水深が深いリアス式海岸であること、寒流の親潮が栄養塩をもたらす豊饒な海であることなどから、さまざまな海産物の養殖が盛んに行われています。佐藤さんの親世代が1970年代に国内で初めてギンザケ養殖に成功したのも、この湾でのことでした。

AM5:50

出港

漁船を走らせ、沖合の生簀（いけす）へ向かいます。冬の明け方の海上は肌を刺すような寒さです。「よほどの悪天候でない限り、雨や雪が降ろうが、毎朝必ずエサやりに行きます。魚という生き物を育てる仕事ですからね」と佐藤さん。



AM6:00

生簀到着、エサやり準備



空が白んできました。港から10分ほどの地点に、佐藤さんの生簀が4つ設けられています。1つの生簀にいるギンザケは約35,000尾。山間部の淡水養殖池で卵から育てられた稚魚を、11月にこの海上の生簀に移して成長させているのです。1つ目の生簀に船を着け、ロープでしっかりと留めておきます。

次に少し離れた生簀を船の反対側に手繰り寄せて係留します。これで2つの生簀に同時にエサやりができます。1つ1つに対して行うよりも、大幅な時間短縮になるそうです。船上の給餌機械から伸びたホースを、左右の生簀内のパイプにつなぎます。

AM6:10

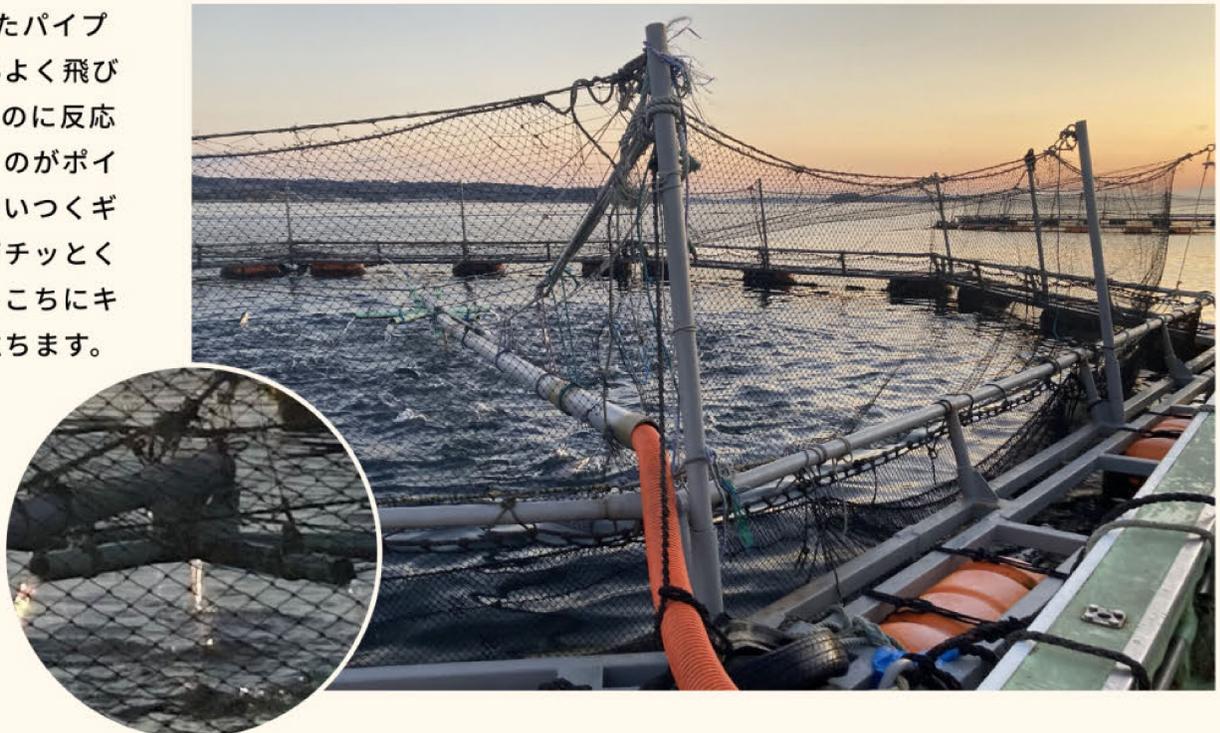
エサやりスタート

大きなコンテナの中には500キログラムのエサが入っています。クレーンで吊り上げ、傾けながら徐々に給餌機械に移していきます。トレイから水とともにエサが流れ、ホース、パイプを伝って生簀の海面に落とされる仕組みです。「以前はスコップでエサをすくって投げ入れていました。手作業でやっていた頃に比べ、今はだいぶ楽になりましたね」



与えているのはEP（エクストルーデッドペレット）と呼ばれる固形飼料。宮城県産飼料米、魚粉、小麦粉などが配合されています。宮城県漁業協同組合が東北大学やJA全農みやぎ、飼料メーカーと共同開発したものです。「以前はイワシなどの生きエサを与えていましたが、この人工配合飼料に変えてから、ギンザケの生臭みがかなり減りました」。EPは水を含んでも崩れないので無駄がなく、環境にも優しい飼料だそう。

生簀の中央で5本に分かれたパイプの先から、水とエサが勢いよく飛び出しています。魚は動くものに反応するので、この勢いを保つのがポイントなのだそう。エサに食いつくギンザケたちが、身をピチピチッとくねらせるたび、生簀のあちこちにキラキラと輝く水しぶきが立ちます。





朝日が昇ってきました。空と海が朝焼けに染まります。「ここにきて作業を始めるのは、いつもだいたい日の出前。これから夏に向けてどんどん出港時間が早くなっていきます」。4月から7月の水揚げシーズンは、朝3時スタートという日も少なくないそうです。

しばし朝日を見つめる佐藤さんに、東日本大震災のときのことを尋ねてみました。「津波で港も船も生簀も流され、海には膨大ながれきが流れ込みました。でも山で育てられていた稚魚は7割ほど無事だった。我々が養殖を再開しなければ、稚魚を廃棄せざるをえなくなります。そうはさせたくないと再開を決意。半年後の秋に稚魚を海水に放ったんです」。心配をよそにギンザケたちは大きく成長し、無事に翌春の水揚げを迎えたといいます。



機械でエサやりをしている間も、常にギンザケの様子に目配りしています。天候や水温などさまざまな理由で食いつき具合が変わるので、エサを流すスピードや量を微妙に調整する必要があります。ギンザケに何か異変がないか確認するのも大切な仕事です。

コンテナに新たなエサを入れ、給餌機械に移して、左右の生簀に流す作業を繰り返します。エサやりは一日1回。この時期は1つの生簀につき500キログラムを与えます。「エサの量は魚の成長につれて増やします。山から移したときは150グラムほどだった稚魚が、水揚げする頃には2キログラムほどにまで大きくなります。養殖ギンザケは本当に成長が早いんです」





AMS: 30

次の生簀へ移動

2つの生簀へのエサやりが終了。パイプからホースを外し、次の生簀へ移動します。反対側にもう1つの生簀を手繰り寄せ、再び同時エサやりを開始。11時頃に終了し、港へ戻って翌日の準備をしたら、ようやく休息をとります。

「こうして手塩にかけて育てたギンザケを、ぜひ多くの方に味わっていただきたいですね。程良く脂がのり、とろけるような食感と甘味が特徴の魚です。一番のおすすめは刺身ですが、焼いたりマリネにしたりして食べるのもおいしいですよ」



COLUMN

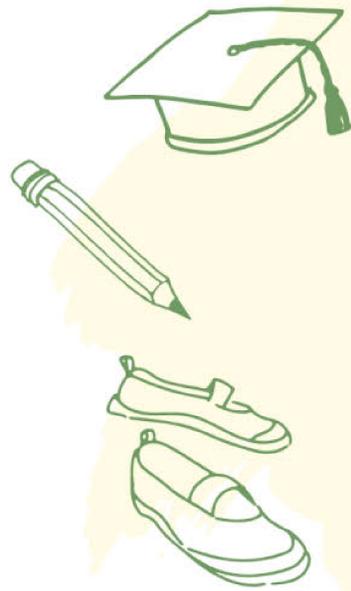
宮城県を代表するブランド食材「みやぎサーモン」



宮城県産の養殖ギンザケを水揚げした際に、「活け締め」「神経締め」という鮮度保持処理を施したものを「みやぎサーモン」といいます。これらの処理を施すことで、ギンザケ本来のおいしさ、刺身で食べられる鮮度、身のツヤや張りが保たれます。「いつも魚にできるだけストレスをかけないように、一気に締めるようにしています。ストレスは味に大きく影響しますから」と佐藤さん。養殖の先駆けである宮城県の生産者たちは、鮮度保持処理技術の向上にも長年取り組んできました。今では県を代表するブランド食材として知られるようになった「みやぎサーモン」。その品質と鮮度の高さが評価され、2017年には宮城県初のGI産品*に登録されています。



*地理的表示法に基づき、伝統的な生産方法や生産地の気候風土が品質などの特性に結びついていると判断され、その名称が知的財産として登録・保護された産品のこと。GIマークが目印です。



農山漁村を元気にする

廃校再生

プロジェクト



農山漁村の新たな拠点として注目されている
廃校活用事例を紹介します。

第11回

未来農業ラボ895

[福岡県八女市]

農業の可能性を広げる
室内型水耕栽培施設



廃校を活用した植物工場が各地で見られるようになってきています。福岡県八女市の山間部にある旧木屋（こや）小学校も、室内型水耕栽培システムを研究する施設に生まれ変わりました。その名も「未来農業ラボ895」。ここから未来を見据えた新しい農業の形を提案しています。

\\ 課題解決を目指し本格的な研究をするために //



(株) ハコブネの森淳社長

未来農業ラボ895を立ち上げたのは、福岡市内のIT企業（株）ハコブネです。スマートフォン向けアプリ開発やシステム開発を中心に手がける同社が、スマートアグリ事業に参入したのは2017年のこと。「近年の農業は、従事者の高齢化や後継者不足、異常気象や自然災害の増加など、さまざまな課題に直面しています。そこで持続可能な農業はどうあるべきかと考えたところ、IT技術を使うことで、容易に生育状況を管理できる室内型水耕栽培が、ひとつの解決策になるのではないかと思ったんです」。社長の森淳さんが参入理由をそう話してくれました。

本社内をはじめ、福岡市内のマンションやガレージで、室内型水耕栽培を実験的に行ってきた（株）ハコブネ。しかし空間を完全閉鎖できないなど諸問題が発生します。もっと本格的に研究できる場所がほしいと考えていたときに、廃校活用のアイデアが浮かんだそうです。インターネット検索で八女市が旧木屋小学校の活用事業者を募集していると知り、1994年築の比較的新しい校舎に惹かれて手を挙げました。「すぐに企業誘致推進係の方から『話を聞きたい』と連絡があり、プレゼンに伺ったら大歓迎を受けました。未来につながる事業内容だと期待していただいたのかもしれない」



旧木屋小学校



小学校の佇まいが残る

市と5年間の賃貸借契約を結び、ラボがスタートしたのは2020年4月。元々エアコンが付いていた校長室・家庭科室・保健室の3部屋が栽培ルームに、職員室がスタッフルームになりました。改装は最低限にとどめ、小学校の面影をできるだけ残しています。施設名の「895」は所在地の地名、八女・黒木・木屋の頭文字を数字化したもの。地域に根差し、近隣住民とも交流できる施設になるようにとの願いを込めて名付けました。

\\ いつでも、どこでも、誰にでも生産できる仕組みを広めたい //



LED照明を当て、培養液を循環させる

閉鎖した室内で、LED照明を光源に、光・温度・培養液（肥料）など作物の生育条件を制御して行う室内型水耕栽培。気温や天候に左右されず、害虫が付きにくいと、年間を通して再現性の高い栽培・収穫を実現することができます。この新しい農業の形がもっと世の中に広がるようにと、シンプルな機能を備えた、省スペースの水耕栽培ユニットを開発しました。「基本の仕組みを押さえれば、多機能である必要はありません。広がるのが大切なので、扱いやすく低コストであることを優先しました。いつでも、どこでも、誰にでも生産できる環境を提供するのがコンセプトです」



IT技術で生産者支援

さらにiPadなどで閲覧可能な生産者支援システムを開発。農業未経験者でもデジタルマニュアルをもとに栽培することを可能にしました。蓄積した生育データから、AIが作業項目設定や収穫予測をします。IT技術を駆使して、ラボと遠隔の栽培現場をつなぎ、生育状況をリアルタイムで共有したり、作業手順やトラブル発生時の対処法をリモート指導したりすることも。今後はマニュアルを多言語化し、海外展開することも視野に入れているそうです。



飲食店の導入例

「室内型水耕栽培なら、都市の限られたスペースでも農業ができます。輸送コストがかからず、新鮮な作物を消費者に供給できるのが都市農業のメリットです。空き家・空きビルの有効活用策にもなりますよ」と森さん。水耕栽培ユニットを導入した福岡市内のバーでは、店内で育てたミントをその場で収穫し、カクテルに加えて提供しています。栽培中のミントは視覚・嗅覚の癒し効果があるインテリアとしても人気だとか。



ミント

ラボではこうした研究や提案を行いながら、実際にさまざまな作物を育てています。ミントやバジルの栽培ルームに入ると、爽やかな香りに包まれます。青々とした葉はみずみずしく、培養液が流れる音は、まるで川のせせらぎのよう。室内型水耕栽培は、作物がすくすくと成長するさまを間近で楽しめるのが醍醐味です。収穫したものはオンラインで販売したり、近隣の方々に直販したりしています。地域の道の駅に卸すこともあり、インスタグラムで時折、収穫の情報発信をしています。



いちご(上)、エディブルフラワー(下)

\\ 地域に開かれた農業エンターテインメント施設に //

2022年9月には校舎内にカフェをオープン。水耕栽培のハーブやいちごはもちろんのこと、近隣農家の野菜なども使った地産地消メニューを提供しています。施設のすぐ向かいに保育園と学童保育施設があるため、子連れで遊びに来てくれる方々が多いとか。地域の集まりにもよく利用されています。店内中央には球体の大きな水耕栽培ユニットを設置。間もなくメダカの水槽と組み合わせて、魚と植物を同じシステムで育てるアクアポニックスを試みる予定です。



未来農業カフェ



夏休みのワークショップ

2022年8月には、学童保育のこどもたちを招いてワークショップを開催しました。テーマは「小さな水耕栽培ユニットを作って自由研究をしよう」。材料は100円均一ショップで手に入るものばかり。ラックを組み立て、LEDライトを取り付け、ポンプを繋ぎ、水を循環させ、好きな作物の苗を選んで稼働。LEDライトが点灯した瞬間やポンプの水が循環し出した瞬間に、目を輝かせていたというこどもたちにとっても、思い出深いイベントになったことでしょう。

「研究施設といっても、地域に開かれた『農業エンターテインメント施設』を目指しています。見学は随時受け付けていますし、カフェやワークショップもその一環です。特に次世代を担うこどもたちには、学びの場を提供し農業の未来について考えてもらえたら嬉しいです。ここはもともと学校ですから」と森さん。栽培ルームとカフェでは、地域雇用のスタッフたちが日々活躍しています。廃校活用が農業の可能性を広げるとともに、地域活性化の一助ともなっている事例を紹介しました。



地域雇用のスタッフたちと



未来農業ラボ895



<https://hakobune-farmers.com/>